

△論文(民俗学)▽

日本磯漁伝統の研究 [V]

—磯漁民(見突き漁民)の漁撈伝承研究—

田 邊 悟

要旨

わが国における海村文化の伝統は、海人(海士・海女に代表される)の影響を大きくうけているとともに磯浜海岸で裸潜水漁撈者(海士・海女)とは別の根付漁撈をおこなってきた見突き(覗突)漁撈民(磯漁民)のアワビ採取をはじめとする魚貝藻(魚介)類の捕採にたずさわってきた人々の影響を大きく受けている。拙稿は、こうした人々の磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究をおこない、この方面の研究を完成させることを目的としている。

キーワード

磯漁 見突き漁 アワビ 海村文化 漁撈民

目 次

(1) (2)

研究目的(承前)

磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究(伊豆半島の東岸部)

[I] 静岡県伊東市宇佐美留田とまたの「ツキンボ」

(一) はじめに

(二) 地域の史的背景など

(三) ツキンボ(漁法)と漁具

(四) まとめ

[II] 静岡県伊東市新井の「ツキンボ」

(一) 漁業生産暦と漁法

(二) ツキンボ(漁法)と漁具

(三) まとめ

[III] 静岡県伊東市川奈の「ツキンボ」

(一) 漁業生産暦と漁法

(二) ツキンボ(漁法)と漁具

(三) まとめ

(1) 研究目的 (承前)

わが国の漁撈習俗を全国的な視野で俯瞰した際、「ツキンボ」また「ツキンボウ」という語彙は今日でも大分県・静岡県・神奈川県・千葉県などに残っている。その意味は「突棒漁業」のことでカジキ突をはじめとする大型魚を船上から鉈を投げて突く漁法である。

『分類漁村語彙』中の「古い漁法」の中にも「ツキンボウ」の語彙がみえ、「突棒漁業」というのは、カジキ類が海づらに^{うか}泛んで居るのを搜して、鉈でこれを突止めるといふ頗る簡単な漁法、而も^{しか}なかなか実用的であるといふ(魚のいろいろ)。関東の近海では房州の漁民がはじめたといふが、恐らく彼らの移入した方法なのかも知れない。山陰地方のカナギの古い事を按すべきである。今は静岡辺でも三十馬力位の小型の機械船で之を行つてゐるのをみかける」と解説している。

この解説にあるように、今日、大分県・静岡県・神奈川県・千葉県等に伝えられている「ツキンボ」(漁)はカジキ類等を突く漁法を意味している。

ところが本稿の事例でとりあげるように、静岡県の伊豆半島東岸地域では「磯漁」を「ツキンボ」とよんでいる。このようなことから漁撈伝承(習俗)にかかわる語彙は、暮らしの中で伝統的に継承されるものなのか、あるいは各地域で独立発生的に使用されはじめ、その語彙が定着していくものであるのかなどの疑問を解くためにも明らかにすべき点であるといえる。

(2) 磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究（伊豆半島の東岸部）

[I] 静岡県伊東市宇佐美留田^{とまた}の「ツキンボ」

(一) はじめに

「研究目的」の項でも述べたように、わが国の磯漁民（沿岸漁業者）の中には、「見突き漁」を「ツキンボ」と呼んでいる人々が、わずかではあるが存在する。

本稿は伊豆半島東岸におけるその一事例だが、この半島の東岸部には、本調査地の他にも静岡県伊東市新井、静岡県伊東市川奈と、同じ伊東市内の三地区で「ツキンボ」という語彙が使われている。以下はその調査内容である。

(二) 地域の史的背景など

『伊東誌』によると、「鰻鮑^{あわび}・新井村・湯川村にあり、新井村は海蟹土を用て是を執る。ふし付と云て、船より竹の竿の先へ貝執の道具を着て執る事は、川奈村の船のみ入て村内の者は比稼を不為。訳有る事なるべし。湯川村は此定なくて一村限りに是をとる也。両村とも味尤好、貝も大やか也。貝浦起立の事は別に貝浦の処にいうべし。」とみえる。（傍点は筆者による）

また、別の項に「石決明^{干あわび}・新井村にあり。先年同村中野某貝浦請負致し、長崎御用として件の品を製し、江府醒

井屋某方へ出す。今日も貝浦稼にて疵貝の分は干鰯に仕立てる也。」と記されている。

このことから『伊東誌』が編まれた江戸時代の末期（著者の浜野建雄は寛政二年・一七九〇年・三月七日生、安政六年八月三日に六十九歳で死去したとされる）頃は「磯漁・見突漁」を「ふし付」と呼んでいたことがわかる。

明治二十七年二月刊行の『静岡縣水産誌』の記載中、卷三の「宇佐美村宇佐美」の項に「視漁・捨五艘」とみえ、「鮑ハ三月ヨリ九月ニ至ル間海士ノ採取ニ属シ又冬春ニ季視漁ニテ採取ス其産出高一ケ年凡ソ三千貫目モアランカ生貝ニテ東京沼津等ニ輪送シ時トシテ乾貝トナスコトアリ亦暑中ハ醤油煮ト



静岡県網代
国土地理院発行 1:25,000

シテ甲州ニ送ルコトアリ」とみえる。(傍点はいずれも筆者による)。

また、「小室村の内川奈」の頃に「石決明ハ陰曆二月節句ヨリ八月ノ十五夜ニ至ル此間海士ノ採取ニ属シ冬季ハ視・漁者ノ採取スルモ、産額ハ平朱三千五百貫目……以下略……」とみえ、上掲書においては「視・漁」と記されている。

以上のように、引用・参考文献の数は少ないが、この地域では「磯・漁」を「ツキンボ」と呼んでいた史(資)料を、いまのところ見出し出す事はできない。

「ふし付」の「ふし」・「フシ」は、「ヒシ」(菱)・「ヤス」(稽)等と同義語で、一般には檜や竹の長い柄の先端に鉄製のカギや数本に分かれた道具をつけたものをいう。「フシツキ」(フシ突き)は、フシを用いて魚貝藻類を突き取る(捕採する)ことの総称である。

あわせて、「視・漁」は「ノゾキ・漁」で、「視・突(き)」・「ミヅキ・見・突(き)」漁そのものをさしている。

なお、この地域の「史的背景」に関しては『伊東市史』が刊行されているので、『市史』にゆずった。参照されたい。

(三) ツキンボ(漁法)と漁具

調査地の留田^{とまた}では見突き漁のことを「ツキンボ」と呼んでいる。ツキンボの漁場は伊東のハトヤホテル前から、北網代境だが、初津^{はづ}から留田^{とまた}にかけての海岸線約八百メートルは砂浜地帯なので、主な漁場は網代境のテンセキ(転石・点石)といつて、海岸・海中に岩石がゴロゴロしている場所に限られる。

留田は、これまで半農半漁の暮らしを営んできたが、ツキンボの専業などではとても生計をたてることができない。

かったという。

伊東市街地から北に見える大崎に至る海岸一帯でも、わずかばかりの人々がツキンボをおこなっている。初津で三軒ないし五軒、調査当時、留田では話者の本部裕正氏一人がツキンボをおこなっていたにすぎない。しかも、話者もツキンボの専業漁民ではなく、伊東市役所に勤務し、要職にある。いわゆる日曜漁民ということになる。

ツキンボの捕採対象物は、アワビ・サザエ・ナマコ・シッタカ、魚類（カサゴ・ヒラメ・ブダイ・メバル・マゴチ等）の他タコなどである。海藻を採取することは自家用のテングサぐらいで、ほとんどない。普通、水深六メートルぐらいまでの操業である。

アワビ採取をアワビツキといい、「アワビオコシ」を用いて採取する。調査時より七年か八年前から使用されはじめた新しい漁具である。十手型をした形態で、川奈や新井のものと同型。アワビをはさみこんで採取する。十手の部分は鉄製で長さ二十五センチ。

この他、アワビ採取をする道具には「アワビカギ」がある。鉄製の棒の部分の長さが六〇センチ、鉄棒の太さは直径七ミリ。先端が鉄棒の部分を含めて三センチほどカギ状になっている。カギのフトコロ部分は二センチ。鉤状になった先の方は細い。（写真参照）

柄は竹材を用いた棹で、地元で採ってきたものだという。

サザエは「サザエツキ」で採取した。昭和初期（昭和十年代）の「サザエツキ」は大型で、先端が四本に枝分かれしている。枝分かれしている部分の根元から先端までの長さは二十三センチあり、ゆるい曲線を描くように制作されている。先端にいくにしたがつて、すぼんだ形態であるのが特長。四本ともイカシが二センチほど付いている

形態がめずらしい。現在（調査当時）では、このように大きな「サザエツキ」を使うほどのサザエは生息していないという。

近年はサザエも小さなものばかりになったので、以前のように大型のものは使用しない。また、「サザエツキ」には、先端が三本に枝分かれしているものも使用されている。

三〇年ほど前まで、「夏季のサザエは食べるものではない」といわれてきた。そのためか売り物にならず、自分達が浜で焼いて食べるくらいであつたという。この話しは一緒にいた近所の故老から聞いた。理由は不明。

魚類を突いたり、ナマコを突き取るために「モリ」を使った。話者が若い頃は、大型のモリが多かつたという。

「三本モリ」で、枝分かれしている部分から先端までの長さが十五センチ。三本とも同じ長さである。先端部分の横幅は六センチ。鉄の丸棒の太さ〇・七センチ。イカシの部分二センチ。鉄棒の柄の部分の長さ八十センチ。

話者が若いころの大型といわれる古い三本モリを実測してみると、枝分かれしている部分から先端までの長さ十二センチ。鉄棒の太さ〇・八センチ。イカシの部分一・四センチというように、大型とはいえないのだが、先端が広く、横幅が九センチあり、モリの先が短いわりに横に広がっている形態なので大きく見える。鉄棒の柄の部分の長さは一メートルあつた。

最近製作（調査当時）の三本モリは、枝分かれした部分より先の長さが十二・五センチ、真中の一本が〇・五センチほど長く出しており、十三センチある。また両脇（左右）の二本はゆるく曲がつているのが特徴。鉄の丸棒の太さは〇・五センチで、古いモリに比較するとやや細い。鉄棒の柄の部分の長さは一メートル。

これらのモリは地元の鍛冶屋に注文して製作してもらい、自分で地元の山に出かけて竹材を入手し、加工して棹に付けた。

その他、近年はナマコの採取をおこなう際、モリを使わずに、「タマ」を用いて掬うようになった。タマの大きさは直径二十センチほどのもの。深さもほぼ同じ。

また、話者が若い頃の「ハコメガネ」は杉材の丸型のものを使用していたが、近年は箱型のものになったというのを聞いた。

漁船を用いて「トモロオシ」と二人で出漁するので、ドーノマに座って「ツキンボ」をおこなった。船を前進させるときは「櫓をやれー」と言う。船大工は宇佐美にもいたので地元注文した。

ツキンボをおこなう際には、棹にあたる風が強いので、操船しやすいのは木造船で、強化プラスチックの船では安定しない。

出漁する前日に西風が吹いて寒い日だと、ナマコが多く出る。ナマコが海底を移動すると糞が出ているので、その跡を探れば一メートルほどの範囲内でナマコを見つけることができるという。ナマコは砂まじりのジャリ地の海底に多く生息しているし、石灰質のような底質の場所にも多い。海底にうねりがなければ採取しやすい。

また、アワビ・サザエは冬季になると岩礁上に出ていることが多いという。

(四) まとめ

この資料調査は著者が平成八年（一九九六）一月二十八日に実施したものである。調査の内容は静岡県伊東市宇佐美留田（旧加茂郡ノ内宇佐美村宇佐美）在住の木部裕正氏（昭和十三年二月三日生）からの聞き取りによるものである。

ある。また、本稿に掲げた漁撈用具の実測も話者の所有するものに限っておこなった。

上述したように、伊東市街地から北に見える大崎に至る海岸線は約八百メートルが砂浜地帯のため、この間に点在する初津・留田^{はづとまた}の地区において「ツキンボ」漁をおこなって生業の主要な部分としてきた漁業者はもとより少なかった。

調査当時、留田でツキンボ（漁）をおこなっていたのは話者のみで、過去においてツキンボ（漁）を実際におこなった経験のある話者にお会いすることはできなかった。したがって、過去においてツキンボ（漁）を主な生業としてきた人々の、年間を通しての生産暦を伺うことはできなかった。

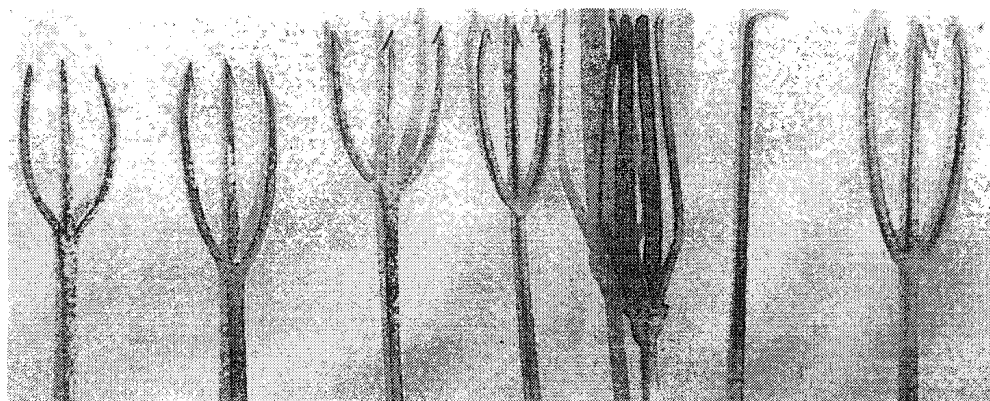
しかし、本稿は、伊豆半島東岸における磯漁伝統の実態を明らかにするための資料調査としての価値は高いと位置づけられる。

すなわち、海とかかわりをもつて暮らしをたててきた人々の伝統の原点を探るために役立つ事例としては貴重であるといえよう。

なお、調査当時、話者は伊東市役所の要職にあり、所謂「日曜漁師」であったことは上述した通りである。

参考文献及び引用文献

- 柳田国男・倉田一郎『分類漁村語彙』 民間伝承の会版 一九三八年
- 浜野建雄『伊東誌』（下） 鳴戸吉兵衛（書写） 市立伊東図書館 一九七〇年
- 静岡県漁業組合取締所『静岡県水産誌』（全） 静岡県図書館協会 一九八四年 （原本は三浦市教育委員会所蔵）



左より四本はモリ

サザエツキ

古いモリ

アワビカギ



下段左より

タマ

タマ

サザエツキ

アワビオコシ

モリ

古い時代のモリ



対岸は伊東市内（中央）

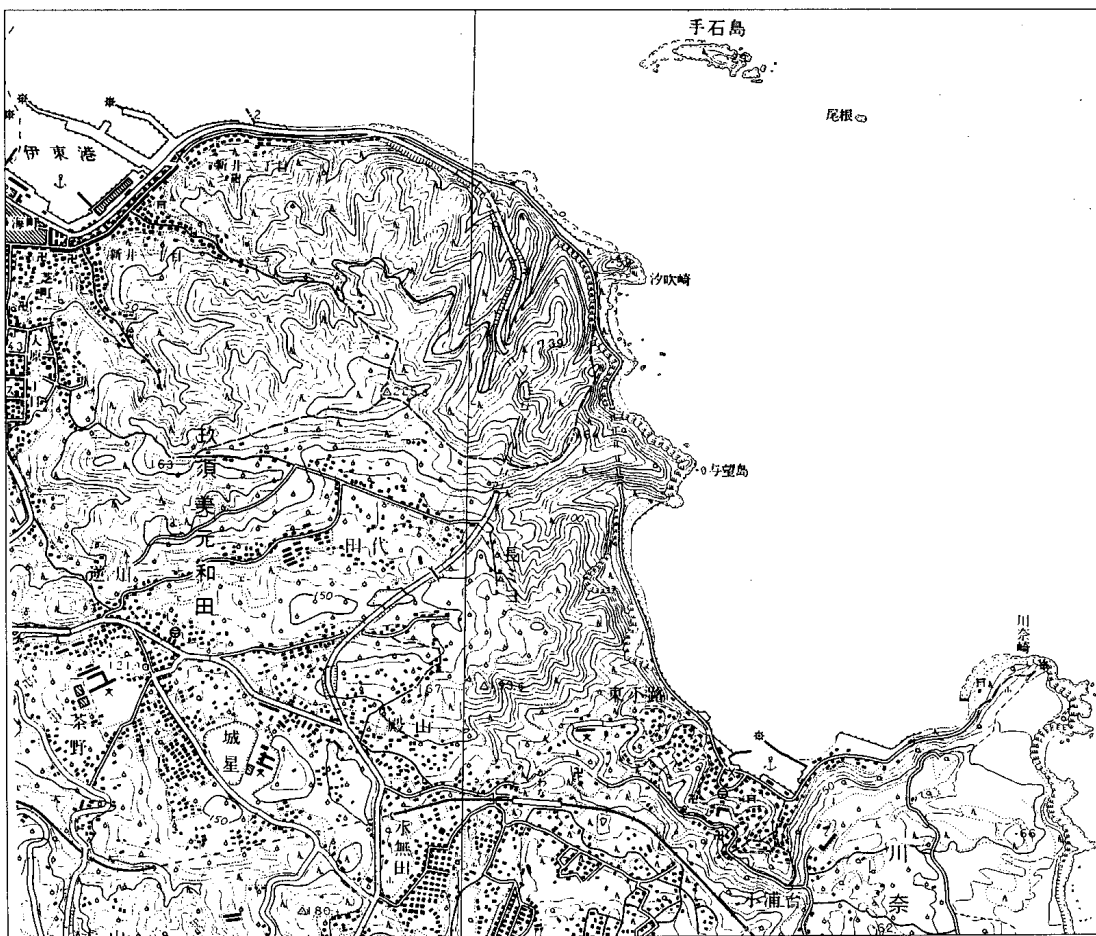
Ⅱ 静岡県伊東市新井の「ツキンボ」

(一) 漁業生産暦と漁法

調査地の新井は、旧加茂郡ノ内伊東村新井で、当地（新井）は伊東市の東南に突き出し、漁港を囲むような場所に位置する。

この地で「ツキンボ」というのは「見突き漁」のことで、普通は漁民仲間でツキンボという言葉で通用するが、「商売はなにか」と聞かれれば「見突き」と答えるといい、職業欄にも「見突き」と書くという。

新井でツキンボをする漁業者は十七人ほどいたが昭和六十三年頃から減りはじめ、現在（調査当時）では七名ないし八名になってしまった。冬季にツキンボをする漁師は、夏季には「モグリ」（裸潜水漁）をす



静岡県伊東
国土地理院発行 1:25,000

るので、ツキンボとモグリの数は同じであった。

話者は中年の頃の十六年間、大型漁船の漁撈長をしていたことがある。したがって、「ツキンボ」は若い頃と、中年以降におこなって今日（調査当時）に至った。

ツキンボでの捕採対象物はアワビ・サザエ・トコブシなどの貝類、ブダイ・カサゴ・ヒラメなどの魚類、それにタコ、ナマコなどが主なものであった。ツキンボによる海藻採取はおこなわれないが、夏季にはモグリをするとテングサ採取をあわせておこなった。

話者が若い頃は、ツキンボを十二月からはじめたが、近年は一月三日（正月明け）から五月いっぱい頃までおこなう。潮が速くなると、棹が上手にはこべないので、サザエが上手に採取できなくなるため、ウオツキ（魚突き）をおこなったりしてきた。

ツキンボは水深がフタツハン（二つ半）かミッツ（三つ）まではいいが、イツツ（五つ）の水深でもやるが数がとれない。（ヒトツは一尋のことで両手を広げた長さの約五尺をいう。）

潮どきによってサザエは岩礁上に出る。「カミ」（潮流の上）に出るという。

イカ釣は六月初旬よりはじまり、八月いっぱいおこなわれた。マイカ・シロイカなどが主な種類であった。

タイ釣を一年間通しておこなったこともある。タイ釣はタテナワの一本釣。近年、釣餌は釣具店からオキアミなどの餌を購入して使用する。

モグリは五月初旬から九月いっぱいまでおこなった。新井のモグリはトコブシを専門に採取する。トコブシは、浅い場所（浅い水深）のほうが実が多く、深場のものは貝殻に虫が付着したようになっていて多いものが多いため、売り物としては見た目が悪い。トコブシを多く採取した時は一日に二十キロにもなったという。調査地の新井は温泉場の伊東市内であるため、トコブシの需要が多かったという。アワビ採取のときは、水深七尋から八尋まで潜る。一回はいつて休憩をとるまでの作業をヒトモグリという。

テングサ採取は、モグリ仲間全員でおこない、三百キロから四百キロも水揚げし、仲間全員で利益を分配した。

（二）ツキンボ（漁法）と漁具

アワビを採取するには「アワビハガシ」を用いる。アワビハガシは、アワビをはさみ込んで捕採するように鉄製の先端部分が二又に分かれ、十手のような形態をしている。しかし、二本に分かれている部分の先端はほぼ同じ長さで、先端部分が二センチほど離れている。

枝分かれした部分から先端までの長さは十三センチ。先端の部分にやや反りが

静岡県伊東市新井の漁業生産暦(新暦)

増田均一氏聞書
(大正14年8月5日生)

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
ツキンボ													アワビ・サザエ 魚・ナマコ・タコ
イカ釣													マイカ シロイカ
タイ釣													タテナワ (一本釣)
モグリ													トコブシ・アワビ サザエ・テングサ

(平成8年8月24日調査)

ある。鉄棒を熱し、たたいて板状に加工し、うすく仕上げてアワビをはさみやすくする。

深い場所でのアワビ採取には潮に流されないように長い鉄棒を付ける。その後にアカガシ（赤櫂）の棒をたして長さを調節する。シラガシ（白櫂）を使うと棹にくるいができてしまうのでアカガシの材質が最も良いとされた。

櫂材は櫓を製作する大工に注文して、大きな船の櫓材（廃材）などを丸棒に削ってもらい、使用した。

また、アワビ採取するのに「アワビカギ」を使用することもある。アワビが岩礁上などの平らな場所に生息している時は「アワビハガシ」で採取することができない。そのためにアワビカギを用いてアワビを採取する。アワビカギは鉄製の丸棒の先端をつぶし、板状に加工し、約五センチほど直角に曲げた形状のもの。先端にいくほど細くなっている。丸棒の太さは直径一・三センチ。長さは約一メートル。このカギを櫂材や竹材などの棹の先端に付けて使用する。

サザエを採取するには「サザエツキ」を用いる。サザエツキは、棹の先端につけた鉄製の四本に枝分かれた漁具である。枝分かれた根元の部分から先端までの長さは二十センチ。先端にいくほど細くなっており、チューリップの花状に、先端は少し外側に反っている。直径約一センチほどの鉄製の棒を板状に加工したもので、サザエをよういに挟み込むように弾力をもたせ、変化に適應できるように工夫してある。根元の鉄棒の長さは四十センチほどで、このサザエツキに長い竹棹を付ける。

ナマコを採取するときには「三本モリ」を使った。ナマコ漁に使用する「モリ」は三本に枝分かれた部分より先端までの長さが九センチほどある。三本とも同じ長さで、鉄製の丸棒の太さは直径約〇・六センチ。イカシは約一・五センチで、先端の横幅は外側で五・五センチ。モリとしてはそれほど大きくないが鉄製の部分の柄にあたる

部分は長く、約七十センチある。

長い竹の棹を付けると海中で浮力が加わり、浮いてしまうため、鉄の重量のあるものを先端に付けるようにしているという。

同じ形態のものでも、タコを突いたり、ブダイ・カサゴ・ヒラメなどの魚類を突く漁具を「ヤス」と呼んでいる。「ヤス」の形態は、ナマコ採取のときに用いる「モリ」とほとんど同じだが、やや大型で先端部分の横幅が広い。三つ又に分かれている枝分かれした部分の根元から先端までの長さは十・五センチ、鉄棒の太さは約〇・七センチ。カエシの部分約二センチ。先端の横幅は外側で七・五センチ。

この他に魚突き専用の「二本ヤス」がある。自家製のヤスで、枝分かれしている部分より先端まで十・五センチ。鉄製の丸棒の太さ〇・五センチ、イカシの長さ二・二センチ。先端の横幅は四センチとせまい。

イカシは両方とも内側に付けられている。これらのヤスも鉄製の柄の部分の長くつくられており、約六十センチある。

上述した「モリ」や「ヤス」を使用する時、潮流が速いと道具が流されてしまうので、「ナガシモリ」といって、斜め（はすにして流すように）使用するのだという。

「ツキンボ」に使用する漁船には特別な呼び名はない。普通は「フネ」とだけ呼んでいるにすぎない。全長約四間、肩幅（横幅の最も大きい上部の部分）三尺ほどのもの。

「フネ」は前方からコマ・サンバン・ドーノマ・トモの四つの部分に分けられている小型の木造船である。

「ツキンボ」をおこなう場合は、トモの後方、トリカジ（進行方向左側）でトモロシと呼ばれる操船役が一人、

櫓を押す。

ツキンボは最前部のコマのトリカジ側に座って「ハコメガネ」で海中・海底を覗き、トリカジ側に並べた棹（モリ・ヤス・サザエツキ・アワビハガシ・アワビカギなど）を使って一人で操業する。

したがって出漁には操船相手のトモロシと二人で組まなければならない。

操船にあたっては、船を前進させるときは「ネレ」と合図をおくり、オモカジ（右側）に移動するときには「オサエ」、トリカジ（左側）に移動するときは「ヒカエ」と合図する。

今日の船は「チャカ」とよばれるエンジン付きの機械を使って漁場までの往復は移動する。話者の増田均一氏所有の船は、自分の名前を船にも付けて「マスキン丸」と呼ぶが、船は神奈川県湯ヶ原より中古の船をゆずりうけたものだという。ツキンボをするには、船があまり大きすぎると、櫓を漕いでも船がすぐにグルグルまわらず不向きだと聞いた。

また、ツキンボの漁場は宇佐美境から川奈の境までの広い範囲でおこなってきたという。

その他、新井では五月から九月いっぱいおこなわれてきた裸潜水漁を「モグリ」と呼んでいる。男達だけがモグリをおこなってきた。

モグリによりアワビ採取をおこなうときは「ノミ」と呼ばれる鉄製の籠が使われる。全長二十九センチ、横幅の最も広い部分二センチ、厚さ約〇・五センチ。籠状になっている反対部分は一・五センチほどカギ状になっており、先端にいくほど細い。ほぼ中央部に小穴があり、細紐を通すように製作されている。この細紐は手に持ったとき、手首にかけて使用する。このノミは古鉄を使つての自製品であると聞いた。

潜水用のメガネは、鼻の出る「ヒトツメガネ」で、神奈川県真鶴で製作したものを購入した。注文で顔にあわ

せて製作してもらう。近年はゴム製のメガネを使用しているので注文することはない。

潜水作業をおこなう際に使用する浮きを「カンタ」といった。カンタは直径五十センチ、高さ（深さ）二十センチほどの木製の浮きで、高さの低い桶に蓋をしたような形状をしているもの。カンタには十文字に細紐を縛り、下部に「スカリ」（網袋）を吊して海中に浮かし、採取物をスカリに入れる。カンタは桶屋で製作してもらった。細紐の材質は綿糸。スカリの材質も綿糸で、入口の直径は約二十センチ。太い針金（鉄製）の輪をつける。スカリの大きさには個人差があるが、一般には、サザエ採取を専門におこなうような場合は大型のスカリを使用した。

（三）まとめ

この資料調査は著者が平成八年（一九九六）八月二十四日に実施したものである。

調査の内容は静岡県伊東市新井二丁目二十一―十二に在住の増田均^{きんいち}二氏（大正十四年八月五日生）からの聞き取りをまとめたものである。また、漁撈用具の実測は話者が所有しているものに限った。

上述した（静岡県伊東市宇佐美留田・「地域の史的背景の項」）でも掲げたように、『伊東誌』中には、新井村（旧加茂郡ノ内伊東村新井）では江戸時代末期より伝統的にアワビ採取がおこなわれてきた。

しかし、そのアワビ採取にかかわる実状をみると、『静岡県水産誌』中に、「第八小区・新井村・鮑螺^{また}ハ自用ニ過キス又鮑^{また}ハ産出スル場所アルモ之ヲ採取スルモノナク大半川奈ノ海士ノ採取スル處トナル」と記載されている。

このような記載があることから、このことについて、さらに調べてみると、前掲書『伊東誌』（下）の中に「産物」の項があり、「鮑^{アワビ}・新井村、湯川村（伊東村の内）にあり、新井村は海蟹士を用いて是を執る。ふし付と云て、船より竹之竿の先へ貝執の道具を着て執る事は、川奈村の船のみ入りて村内の物は此稼を不為。：（以下省略）」とみえる。（傍点は筆者による）

さらに同書の「瀬合」の項に、「春夏は鮑突・蟹人ここに鮑を執る也（以下略）」とみえるほか、同じく「貝浦」の項には「貝浦・新井村・湯川村両村にあり、新井は海士共下手白浜稻取又は初島、真鶴辺より来て稼方をする也、文政中新井村中野某発起して此稼知れり。往古はふしつきと云て、船中より海底を臨み見て貝の石に着きたる突取る也。是川奈村の稼にて新井村の磯へ入会稼也。新井村にて此稼なし。しかるを文政中中野某発起して海士を水底に入て稼事初れり。湯川村は同村進退宇佐美境より磯部通り海底七八尺の深き処を、船を浮かべ件のふし付という稼方を致す也。新井村は深さ五尋斗の海底へ海士かつぎ入て貝を執る也。是を貝浦と唱なり。運上村益あり」とみえる。（傍点は筆者による）

以上のように、古文獻等から見ると、新井村では入漁により、他所の者の鮑採取を認め、自村の人々の鮑採取を禁じていること。また近世末期から明治期においては、「ツキンボ」という語彙は使われておらず、「ふしつき（付）」と呼ばれていたことがわかる。

〔Ⅲ〕静岡県伊東市川奈の「ツキンボ」

（一）漁業生産暦と漁法

調査地の川奈は、旧小室村ノ内川奈である。川奈では磯漁業（見突き漁）を「ツキンボ」という。ツキンボは十月下旬から十二月初旬にはじまり、翌年の三月いっぱいまでつづけられた。

十二月より三月までのこの季節は潮が澄むので海底を覗き見て魚貝藻類（魚介類）の捕採をしやすいこともあるが、四月にはいると捕採対象物（漁獲物）のナマコの値段が安価になるために捕採をやめることもあるためである。ツキンボではナマコの他にアワビ・サザエの採取をおこなうほか、磯魚であるブダイ、砂地にいるヒラメやアンコウ、タコなども捕獲する。しかし、アワビは少なくナマコ・サザエ・タコが主であった。戦前はタコが多く、大きなタコは四キロほどもあるものが捕れたという。また、昭和初期頃までは、ブダイ等の磯漁も多く生息していたと聞いた。（調査地の地図は「新井」の項を参照のこと。）

戦前における川奈のツキンボ達は高級魚であるヒラメなどを捕獲対象にしていた。ヒラメは、ほとんどが砂地に生息しているので、他の捕採対象物とは生息場所がちがうため、捕獲に専門性が求められる。しかし、大きなヒラメは最高十二キロもあるものが捕れたので、それをねらった。

ツキンボでナマコを採取するときはモリを使って突き取った。大きなモリで突き取るとナマコに傷がつくので、十年ほど前（調査当時以前）より小さなモリが使われるようになった。最近、ナマコはタマで掬うようになったの

で傷はつかない。突き取ったナマコは傷がつき、商品価値が低下し、値段を安く買われてしまうからである。

川奈ではツキンボで海藻採取をおこなうことはなかった。ワカメなども少なく、自家消費程度の採取であった。

コムツ釣りは六月からはじまり、十月いっぱいまでつづく。コムツ釣りは夜の漁。三十センチ前後に成長したムツを釣る。

また、一本釣漁として四月から六月いっぱい、キンメダイ・メダイ・ムツの一本釣をおこなった。昼の漁で、漁場は「ジャマ」（地山）と呼ばれる場所付近で、今日では伊東沖群発地震の震源地として有名になった場所である。この付近の海底は水深が四百メートルから五百メートルの深さに及ぶが、キンメダイ・メダイ・ムツなど、いずれも大型の魚が釣れ、大きさ（重さ）も一キロから四キロのものが漁獲できた。

話者の奥さん（タツ子さん）も昭和二十九年に結婚して以後、アマ（裸潜水漁）をして家計を助けた。出身地が三重県の相^{おうさつ}差なので海女の経験は豊富であった。アマをおこなうのは、四月はじめてから十一月いっぱい、アワビ・サザエ等を採取した。

静岡県伊東市川奈の漁業生産暦(新暦)

まさひろ
杉山正寛氏聞書
(昭和2年5月24日生)

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
ツキンボ													ナマコ・アワビ サザエ・ブダイ ヒラメ・アンコウ・タコ
コムツ釣													ムツ (夜釣)
一本釣													キンメダイ・ メダイ・ムツ (昼釣)
アマ													アワビ・サザエ 奥さん稼働

(平成8年1月27日調査)

(二) ツキンボ（漁法）と漁具

上述の如く、ツキンボでナマコの採取をおこなう際には「モリ」を使ってきた。川奈では「三本モリ」を使った。同じ伊東の新井でも「三本モリ」が使われた。四本モリよりはナマコに傷をつけないで採取できる。

戦前から戦後にかけては大きなモリを二本ぐらい持って行ったが、十年ほど前から小さなモリを使うようになった。捕獲対象物の商品価値をさげないためである。

戦前は川奈に鍛冶屋があり、地元でモリなどを製作してもらっていた。地元の鍛冶屋で製作したモリは「イカシ」が丈夫でとれなかったが、他所より購入したものはイカシが弱くて曲がりやすく、すぐだめになってしまった。

モリを使ってナマコ採取をする水深は、深い場所で八尋ほど。モリ先はカシ（赤檜）材を二尋に削った細い丸棒に上げる。このカシの丸棒は船大工に注文して製作してもらった。二尋ほどの水深でも大きなヒラメを突くことはあったが、深い場所ではカシ材の棒のあとにタケ（竹）で三尋の長さの棒を一本あるいは二本つなぎ、最後に三尋のタケ棒をつけて八尋の深さにしてナマコを突いた。また、ツキザオはタケの二尋ほどのものを使うこともあった。タケはオンナダケで、自分で山に切りに出かけた。毎年十一月頃はタケが水分を吸わなくなる時季なのでよいといわれた。山から切ってきたタケは十日ほどたってから火にあてて真っ直ぐにした。この作業は「タケをなおす」といった。毎年十一月に切った新しいタケで十二月からの漁に使った。

ヒラメは、魚体の全部が見えるときは、餌をねらっているか、あるいは他から移動してきたばかりの時なので、注意深く、警戒しているので素早いため突きにくい。ところが、砂地の中から眼や鼻先きだけが見えているときは、海底の砂地に潜りこんで見ているか、寝ているときなので警戒している様子がないたため突き取りやすい。

モリの大きさは「三本モリ」の大きなもので、三本に枝分かれしている部分の付け根から先端までの長さが十六

センチ。モリの太さは枝分かれしている根元の部分で直径〇・七センチ、先端にいくにしたがつて細くなっているが、先端に近い部分でも直径〇・五センチほどある。「イカシ」の長さは一・五センチ。三本とも同じ長さで、太さも同じ。先端部分の幅は横に六センチある。

また、深い場所のヒラメを突くときに「オトシモリ」と呼ばれる重量のあるモリも使われた。このオトシモリはツキンボをおこなう漁師全員が使用したものではなく、「マタイチ丸」と呼ばれる船名の漁船を所有している漁師が使っていたという。オトシモリはモリの先に細紐を結び、モリの重量を利用して深場のヒラメ等の上からおとすもの。ひらめにかぎらず、モリを使用して魚類を突くときは魚の頭の部分を狙う。他の部分を突くと商品として、売り値が安くなってしまう。

アワビは「アワビハガシ」と呼ばれる専用の漁具で採取されてきた。上述したように、この地でのアワビ採取量は少ない。

アワビハガシは先端が鉄製で二又に分かれ、下部がやや短かく鉤になり、十手（じつて）に似た形状であるが、鉄棒の部分は板状に加工しており、アワビをはさみやすくするように工夫されている。

枝分かれしている根元部分から先端の最も長い上部は二十センチ、下部の鉤の部分は十七センチ。約三センチの幅でアワビをはさむようにしてある。鉄製の板材の部分は一・二センチほど。先端の部分が細くつくられ、バネ状に広がるため、大きなアワビでも挟み込めば広がる。

サザエを採取する漁具を川奈では「サザエツキ」と呼んでいる。先端が三本に分かれた鉄製の漁具で、枝分かれした部分の長さが二十四センチ。鉄の丸棒を加工したもの。丸棒の太さは直径〇・七センチ。先端が細くなっている。

る。特徴は三本が三角形の各角（カド）の部分に位置していること。最近では四本に枝分かれしたもので、丸棒の部分に板状の鉄（あるいはステンレス・スチール）を使ったり、先端をチューリップの花のように、やや外側に開いた形状に製作し、サザエを挟み込んで採取しやすく工夫したものも使われたという。こうしたサザエツキは、ステンレス・スチールの材が市販され、入手しやすくなったために、鍛冶屋に注文して製作してもらう。錆びにくい材質なので手入れもしやすくなった。

話者によれば、ツキンボで「ハコメガネ」が使用される以前は、「油を流して海底を見たということ聞いたことがある」という。

ハコメガネは家大工に製作してもらったものを使った。川奈で話者が使用していたハコメガネは昭和三十年代に製作してもらったものを使いつづけてきたという。ハコメガネの材質は杉材。深さ（高さ）四十センチ、底のガラスをはめてある部分は長い部分が四十八センチ、短い部分が三十センチで、やや長方形になっている。上部も五センチほどの割合で小さく作られている程度。このハコメガネには細紐がつけられており、波にさらわれないように紐の一方を船に縛りつけ、左手でハコメガネの枠を持ち、右手でモリ等の漁具を持つ。

昭和三十五年頃に購入した木造船（漁船）は中古の船であったが、オモテ・ドーノマ・トモの三つに区分けされていた。小型の木造船だが特に船の名称（船名・よび名）はなかった。

現在（調査当時）使用している船も木造船だが○・六四トンの大きさで、長さ四・五三メートル、幅一・五三メートル、深さ○・四二メートルのものである。

この船はオモテ・ドーノマ・カメ・トモの四つに区分されており、ツキンボ（操業・作業）をおこなうのはトリカジ（左側・左舷）のトモで、乗船している「トモオシ」が櫓を押した。「トモオシ」役は妻（奥さん）の仕事。

トモオシとの合図は、船を前進させる場合は「ヨーソロ」といい、右側（オモカジ）にまげるときは「オセー」という。また、左側（トリカジ）にまげるときは「シカエー・シケー」と合図した。

近年、漁船も強化プラスチック（F・R・P）に変わったが、「ツキンボ」は木造船のほうが操船しやすく、作業（操業）もしやすいと聞いた。

その他、話者が若い頃、地元の川奈には「又一丸」という鮮魚の仲買人がいたので、漁獲物はすべてそこに売った。その頃は「又一丸」で買い集めた漁獲物を伊東の町に運搬するために、地元の人々を雇い、背負い運搬により徒歩で運んでいた。

その後、トンネルが開通したり、バスが運行されるようになって、バスを利用して、奥さんが水揚げした魚介類を伊東の町まで売りに行くようになった。

話者によると、伊豆半島で「ツキンボ」をおこなっているのは、川奈（地元）のほか、伊東市の新井など。その他、赤沢でもすこしはやっていたし、宇佐美、下田方面でもやっていたという。また、伊豆半島の西海岸でもおこなっていたという。

（三）まとめ

この資料調査は著者が平成八年（一九九六）一月二十七日に実施したものである。

調査の内容は静岡県伊東市川奈七〇〇―四に在住の杉山正寛氏（昭和二年五月二十四日生）からの聞き取りをまとめたものである。また、漁撈用具の実測は話者が所有しているものに限った。

これまで話者の家での生業は純漁業（専業漁師）で正寛氏が漁業専業で川奈漁業協同組合の理事などもうけていると共に、奥さん（タツ子さん）が三重県志摩半島の相^{おうさつ}差より嫁入りしたとのことで、夏季は裸潜水漁をおこなう「海女」であつた。二人が結婚した昭和二十九年当時は、奥さん（タツ子さん）以外にも、当時、三重県の相^{おうさつ}差より、多くの海女が出稼ぎに来ており、八幡や赤田で裸潜水漁をおこなっていた。奥さんはその中の一人であつた。

調査を実施した平成八年現在（当時）、この地区（川奈）で「ツキンボ」をおこなつて生業としているのは話者の家一軒（一隻）となつたが、話者がツキンボをはじめた昭和二十年以前には五軒（五隻）ほどツキンボをおこなつて生計をたてていたという。

以上、伊豆半島東岸部の伊東市内の三地域における「ツキンボ」に関する伝統的な存在形態についてみた。

三地域とも、調査当時には「ツキンボ」という語彙が使われていることは明らかにしたが、古文獻や近世地方文書中には「ツキンボ」の語彙はなく、「ふし付」・「覗漁」と記されている他に「川奈村明細帳^{注1)}」の中には「いしづき」とみえる。「石突（き）」は、アワビを「石決（決）明」と表記するところから、アワビ突きを「石突き」あるいは「岩突き」とした呼称であろう。

以上のようなことから「ツキンボ」の語彙は新しく使われるようになったとみてよい。その理由としてわが国には、カジキを銚で突く「突きん棒漁」の伝統があり、特にこの漁のさかんであつた地域の一つに大分県津久見市の保戸島や臼杵市があげられる。明治四十年代になると漁船が動力化され、それにともなつてカジキを漁船で追うことが可能になったため、明治末期以降、銚でカジキを突く「ツキンボ漁」は、太平洋沿岸では伊豆諸島から三陸沿

岸、さらには青森県の尻屋崎沖まで出漁するに至っている。

また、千葉県の白浜や千倉でもカジキの「ツキンボ漁」はさかんにおこなわれてきた。こうしたカジキ漁（ツキンボ漁）の漁船が漁獲したカジキは伊豆半島の稲取や伊東に水揚げされることが多かった。それはカジキを刺身に調理するための利点があったからである。稲取や伊東、熱海、下田など、伊豆半島の温泉場では数百人にもものぼる団体客を受け入れる温泉旅館やホテルが多い。

このように大勢の宿泊客をあつかうにあたり、配膳前に時間をかけて刺身料理などを準備しなければならぬのだが、赤身のマグロなどを料理するために包丁を入れて切り身になると、時間がたつにつれて刺身から身汁が出て、くたくたになり、赤汁がでるばかりか、身がよれよれになってしまう。さらに大根など白いつけあわせに赤汁がつき、にじんてしまう。

しかし、カジキは調理したまま長時間たっても身汁が出ることもなく、刺身はきちんと立ったままなので、配膳前のかかなりの長時間でもそのままの状態が保たれるため、温泉場で大勢の客をあつかうような地では刺身の食材として人気があり、需要が大きいのである。

こうしたことから、「ツキンボ漁」の漁船が伊豆半島の各地の漁港に入港し、カジキの水揚げをおこなうと、カジキの値段も高いし、温泉場の人たちにも大いに歓迎されるようになった結果、「ツキンボ」という語彙も自然に地元の漁民のあいだに広まり、通用するようになったとみられる。

辻井善弥著『磯漁の話』の中にも、「見突き漁法の呼称」として、「静岡県伊豆半島・ツキンボ」とある。伊豆半島の西岸・土肥地区の事例だと著者から伺った。土肥も温泉場なので参考になる。

なお、この資料調査は、著者が文部省（当時）の科学研究費補助金（「磯漁民」〈見突き漁民〉の漁撈伝承研究・一般研究C・平成六年度、平成七年度、平成八年度の三ヶ年継続研究）により実施した結果の一部である。明記して関係機関ならびに関係各位に謝意を表する。

注(1) 伊東市史編纂委員会『伊東市史』資料編二百六十頁「川奈村明細帳写」（嘉永四年）伊東市教育委員会 一九六二年

参考文献及び引用文献

辻井善弥『磯漁の話』 北斗書房 一九七七年

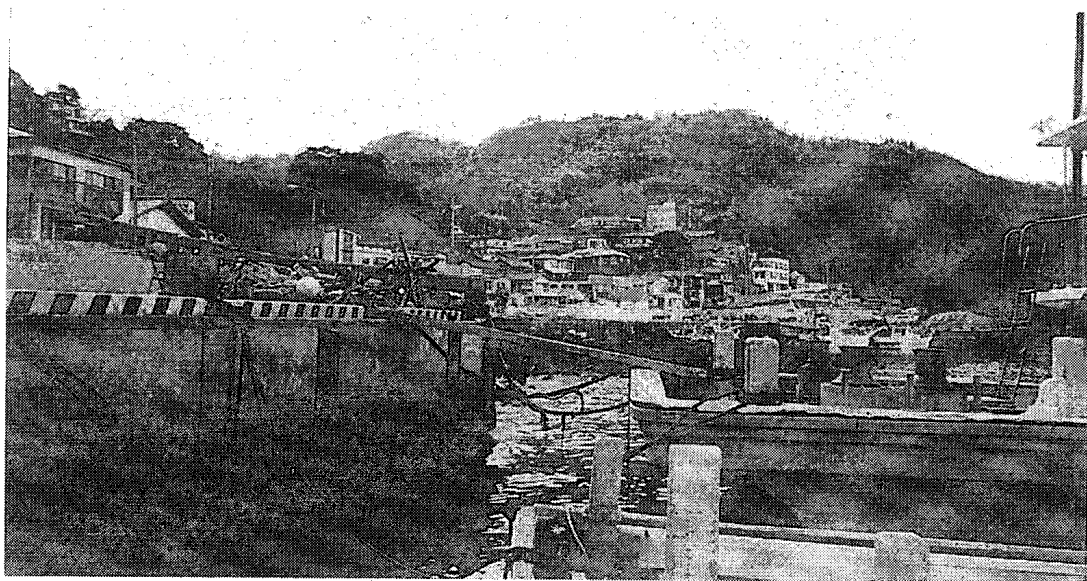
（たなべ さとる 本学教授）



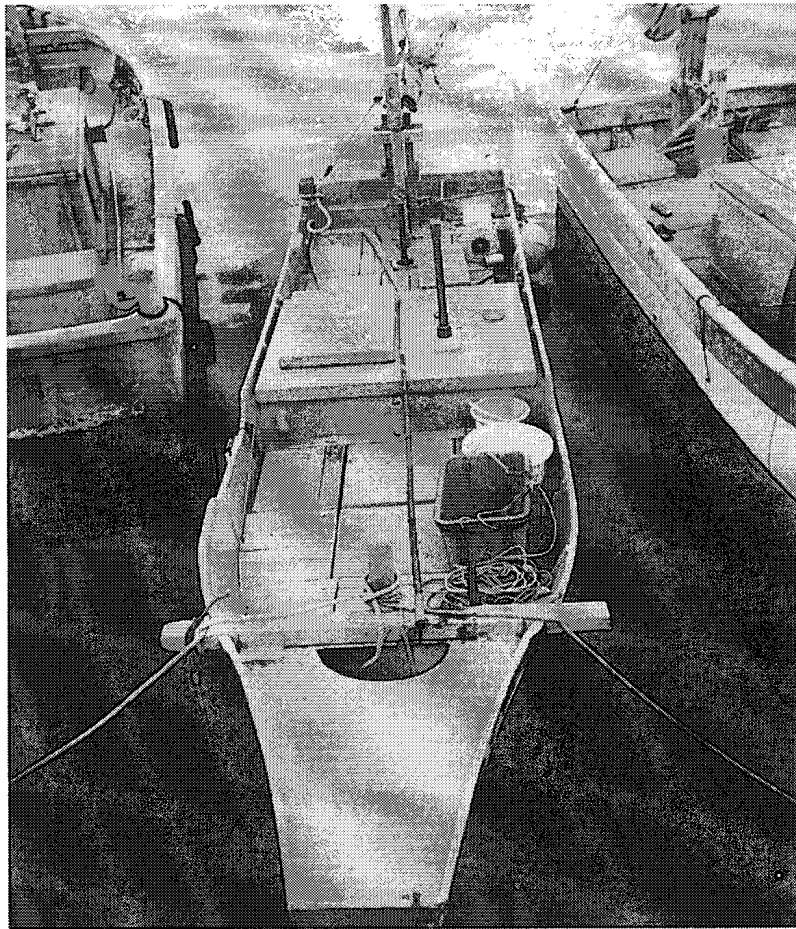
メガネを使用して
海中・海底を覗く杉山氏



左より
サザエツキ・サザエツキ
三本モリ・二本モリ
サザエツキ・アワビカギ
(新井のツキンボ漁具)



調査地点描 (川奈)



現在使用の漁船（川奈）



ハコメガネは杉材で、ガラス部分は約四十八センチ×三十センチ。深さ（高さ）約四十センチ。（川奈）